

サイエンス コミュニケーターだより

Volume 1
May, 2014
<http://kahaku.sc>

みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや180名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターと、みなさんとをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

サイエンスコミュニケーターの声

科学をみんなで共有したい

～クリスマス・レクチャーでの経験を糧に～

科学が好き。人との交流が好き。そのかけ算の活動をしたく、サイエンスコミュニケーションに興味をもちました。その根っこには、「科学をみんなで共有したい」という思いがあります。

サイエンスコミュニケーションのノウハウを身につけようと受講した国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座では、「自らが科学を伝える」「人と人をつなぎ、科学を伝える場をつくる」という、二つの立場に求められるスキルを学びました。

講座修了は、私のサイエンスコミュニケーション活動の出発点となりました。修了して1年と少しが経ちましたが、その間、さまざまなご縁に恵まれてサイエンスコミュニケーション活動を行ってきました。その一つが、クリスマス・レクチャーの舞台コーディネーターでした。

クリスマス・レクチャーは、毎年クリスマスの時期に英国王立研究所がロンドンで開催している青少年向けの科学実験講座です。「電気の父」マイケル・ファラデーが子どもたちへのクリスマス・プレゼントとして始め、1825年からの歴史があります。日本でも、同様の講座を1990年から開催してきました。

2013年開催のタイトルは「現代の錬金術師」。私は日本公演の舞台コーディネーターとして、舞台上の演出ほぼ全てに関わりました。業務内容は、日本公演の内容決定のための日英スタッフ間の調整や公演リストの作成、台本の翻訳、当日の進行補助やマスコミ対応など多岐に渡り、サイエンスコミュニケーションのさまざまなスキルを実践できました。スタッフ間の調整やテレビ番組の内容チェックでは、「対象を意識して、その対象に合わせた伝え方を考える」という国立科学博物館の講座での学びが生まれました。

なかでもチャレンジングだったのは、炎の出るデモに関する

調整です。舞台上で炎などを使う際には、安全のための制限があり、管轄の消防署や日英スタッフとのやり取りが肝要でした。消防署に実験の趣旨や内容を伝え、提示された制限の中でスタッフと実験規模などの調整を重ねることで、安全を確保しつつ、公演の流れや趣旨を変えずに魅せる演出を実現できました。

また、英国での科学の魅せ方を間近で学べ、英国らしさを大事にしつつ日本で受け容れられるものにする、という国を越えたサイエンスコミュニケーションの一つの在り方を経験できたことは今後の活動の大きな糧となりました。そして何より、非常に多くの参加者に満足頂き、また、科学により興味をもって頂けたことを嬉しく思い、それに少しでも貢献できたことを誇りに思います。

無我夢中で取り組んだクリスマス・レクチャー。濃密で大きな成長の機会になりました。今後もこの経験や国立科学博物館での学びを活かし、いろいろな方々とつながりながら、「科学をみんなで共有したい」という思いを実現していきたいです。



公演直前に、公演内容の細部などを確認中

中内 彩香

国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター。ヒトのゲノムと病気の関連を研究し、2014年3月に博士号(保健学)を取得。4月からは研究所で広報業務に従事。趣味は旅行。

科博 SCA 代表のごあいさつ



国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座の修了生は、いまや 180 名におよびます。国立科学博物館を共通の学び舎とする、この財産とも言える修了生のネットワークを活かし、サイエンスコミュニケーター同士、あるいは社会との交流やマッチングを行うため、修了生による有志団体、国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）を 2011 年に設立しました。これからの社会におけるサイエンスコミュニケーション活動を盛り上げるため、科博 SCA は積極的に外部との連携を目指しています。本誌では、サイエンスコミュニケーターの活躍や、思いなどを、みなさまにお伝えしていきます。ご意見・感想がありましたら、ぜひ、編集部までご連絡ください。

（科博 SCA 代表 鈴木 佑）

活動紹介

科博 SCA では、さまざまな分科会をつくり、サイエンスコミュニケーションに関連する活動を行っています。今回は、ゲスト研究者と参加者が飲み物を片手に同じ目線で語り合うイベント「サイエンスカフェ」を企画・運営する、サイエンスカフェ分科会の活動をご紹介します。

ミュージアム・カフェ会

カレンダーの作り方～星をみつめた江戸の人たち～

科博 SCA サイエンスカフェ分科会のイベント第 1 弾として、2 月 22 日に国立科学博物館にてミュージアム・カフェ会「カレンダーの作り方～星をみつめた江戸の人たち～」を開催しました。ゲストにお招きしたのは、国立科学博物館で江戸時代の天文学について研究されている西城恵一さん。12 名の参加者と、日本茶と金平糖を味わいつつ、天文学とカレンダーにまつわる話で、閉会后まで盛り上がりました。今後のイベントの開催予定などはブログ (<http://cafe.blog.shinobi.jp>) にてお知らせする予定です。興味をもたれた方はのぞいてみてください♪

（科博 SCA サイエンスカフェ分科会 江崎 和音）



サイエンスコミュニケーションって？

私たちの身のまわりには、科学・技術を用いたさまざまな製品やサービスがあります。一方で、その内容は非常に高度でわかりにくく、とすればブラックボックスのようになってしまいます。また、放射線の影響のように、科学的な情報が否応無く生活に入り込んでくる場合もあります。

サイエンスコミュニケーターは、そんな「わかりにくい」というイメージの科学・技術を理解し、使いこなすお手伝いをする存在です。博物館・科学館の解説員をはじめとして、科学イベントのコーディネーター、新聞記者や理科教員など、さまざまな立場で活動しています。

科博 SCA って？

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）は、国立科学博物館が開講している「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」の修了生組織です。今回ご紹介したサイエンスカフェのような一般の方向けイベントの開催や、講座修了生の活動支援などを通して、知の社会への還元の一助となることを目指しています。

また、科博 SCA では、イベントのコラボレーションなどのご相談も受け付けております。本会には、さまざまな知識やスキルをもつ 180 名以上の講座修了生のネットワークがございます。詳しくは HP (<http://kahaku.sc>) をご覧ください。

編集後記 「サイエンスコミュニケーターだより」第 1 号が、なんとか発行のはこびとなりました。手に取ってくださった方、本当にありがとうございます。

さて、本誌発行の準備を進めている間、科学界限では STAP 細胞の話

題で持ちきりでした。科学を伝える立場の私としては、研究者や科学研究全体への信頼が揺らいでしまうことを心配しています。信頼は、日々のコミュニケーションの積み重ね。私たちサイエンスコミュニケーターが貢献できる部分もあるのでは、と思う今日この頃です。